

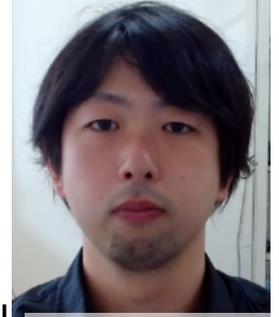
ゲノム・遺伝子源解析センター 月例セミナー

とき 令和4年12月13日（火） 17時～18時

ところ 農学部 DS304

講演者 農学部・助教 水田圭祐 博士

題目「多収・高品質を目的とした栽培体系の
改良がコムギの形質におよぼす影響」



水田圭祐 博士

概略

コムギは、収量と品質を高い水準で両立することが困難な作物である。コムギの品質評価では子実のタンパク質含有率 (GPC) が重要となるが、GPCはシンクソースの関係から収量とトレードオフの関係がある。この関係を突破するには、収量を高めつつタンパク質の原料となる窒素を効率的にコムギへ吸収させる必要がある。講演者は、慣行的なコムギ栽培体系に比べて窒素の吸収効率が高い窒素施肥体系である「穂肥重点施肥」を考案し、それがコムギの収量とGPCに関する様々な形質におよぼす影響を明らかにしてきた。

本講演では、これまでに報告してきた研究成果の中から①収量に関する形質として穂数(莖数)に着目した研究成果、子実タンパク質含有率に関する要素として窒素吸収量に着目した研究成果、③収量と品質の両方に関する形質として稈の形態に着目した研究成果についてそれぞれ発表する。

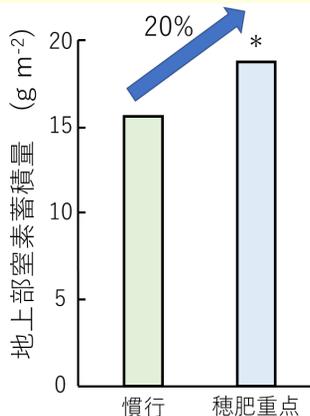


図1 2015/16年作期に熊本県で栽培した「ミナミノカオリ」の成熟期における地上部窒素蓄積量。

*は、分散分析において5%水準の有意差があることを示す。



図2 2017/18年作期に栽培した「せとさらら」の莖立ち開始期における生育状況と成熟期における群落の様子